

かゑらじと かねて思へハ 梓ヲ
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第62号

平成30年2月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

軍法とは士法に在り、と断じた山鹿素行

兵法はわか心を治め家を整え国を平らかにする

＝ 素行学に一貫する特質は、実学的傾向である ＝

楠公父子万世忠孝の鑑

今月は、楠正成一巻之書序文で、「忠孝は武士の励む最たる徳で、非常に難しいが、歴史上もっとも忠孝を尽くしたのは楠正成・正行親子しかいない」と絶賛した山鹿素行について学んだ。

最初に、楠正成一巻之書の序文を見てみよう。この序は、貞応3年(1654)に書かれたもので、元和8年(1622)生まれの山鹿素行が32歳の時の書である。

楠正成一巻の書序

「身を立て、道を行い、後世に於て名を挙げ、以て父母を顕すは孝の終なり。終とは、孝道を全くするを云えり。孝は百行の本にして、未だ父母に孝にして君に忠ならず、君に忠にして父母に孝ならざる者はあらず。忠孝に途なくその徳一なり。嗚呼忠孝は士の希て励むべき所なり。然れども其の實を履み、その全きをあらわす、これ難し。獨り楠公父子万世忠孝の鑑として、その徳、古今に貫徹す。夫れ君に忠を致さんと欲する者は、治世に亂を忘れず。亂を忘れざるは、功を立る。忠の大いなるものにして兵学の勤むべき所なり。

此の書、楠公の遺訓、兵家の龜鑑、忠孝に志す士は、拳々服膺^{注①}して読まずんばあるべからず。これ身を立て、名を挙げるの韜略^{注②}なり。

久しく余が家に藏むいへども、忠孝は天下の達道^{注③}、楠公は万世の明鑑^{注④}なるを以て、敢えてこれを秘せず、ここに梓^{注⑤}に壽して、四方に達し、後世に照らさん。これを庶幾す。故に謹んで此の言を序とす。

貞応三歳甲午十一月既望

後學 山鹿甚五左衛門平貞直

- 注① 拳々服膺 常に心中に銘記し、忘れないこと
- 注② 韜略 兵法の書である「六韜」と「三略」の略
- 注③ 達道 いかなる場合にも行われるべき人間の道
- 注④ 明鑑 曇りのない鏡 物の真実を見通す力
- 注⑤ 梓 古くアズサの木を用いたことから、印刷用の版木

孝道は百行の本

忠孝は武士の励む最たる徳

この序文の文意は概ね以下の通り。

素行は、「終とは、孝道を全くするを云えり」と、孝を尽くすことは百行のもとと云う。

忠孝は武士の励む最たる徳で、非常に難しいが、歴史上もっとも忠孝を尽くしたのは楠正成・正行親子しかいない。

この書は楠公の遺訓であり、兵家が目指す鏡である。心して、常に心中に銘記し、忘れなければ、立身出世は間違いない。

山鹿家に秘伝として伝わってきたが、忠孝を尽くすことは人の道として当然の事であれば、楠正成は歴史上最たる模範の鑑であることから、書物にして後世に残すことにした。



山鹿素行肖像



山鹿素行肖像

残る2系統の肖像画

このように楠親子をほめたたえた山鹿素行の武士道論、兵学とはどのようなものであったのか。

山鹿素行は、平戸藩第4代藩主、松浦重信と親しく、また、弘前藩第4代藩主、津軽政信に「大星伝」を受け、同じく弘前藩家老、津軽玄播にも「大星伝」を受けている。そのため、残る肖像画は、平戸系(写真上)と津軽系(写真下)の両系統がある。

山鹿素行の武士道論は、実践的兵学

谷口眞子（日本近世史専門・早稲田大学教授）は、山鹿素行の武士道論を次のように述べている。

—— 「武教全書」は、まさに実践的兵学である。その視点は、軍隊を掌握する総大将・総司令官としての立場から書かれており、想定している対象は大名クラスと考えられる。

「武教小学」序文では、武士が三民（農・工・商）の長たりうるのは「能く身を修め心を正し、しこうして国を治め天下を平らぐ」からとする。

山鹿素行は、「書齋の学問」は認めず、修身にはじまり、人としての道を尽くし、世界を治めるための学問は、実践性を具えている実学でなければならない、と考えていた。

「山鹿語類」「土道篇」の冒頭では、武士は文武の徳を兼ね備え、三民の上に立つ人倫の模範たることが職分であると述べられている。素行の土道論の根本をなす考え方を表現したもので、よく知られた部分である。この職分論は、当時確立しつつあった身分制社会における、武士の存在理由を明確に述べている。

素行は、近世の武士は単なる軍人でも役人でもないと考えていた。一事一物に至るまですべては天地の法則によっており、「聖人の道」を日常の生活で実践することが、君子・大丈夫たる者の職分であると明言したのである。

素行にとって武士とは、官僚的・役人的存在ではない。

「武」国の礎として、武力を担っていることを自覚して武芸にいそむとともに、主君を支えて自らも道徳を身に着け、人としての模範たるべき職分をもった人間である、と。

素行学の意義

年齢と共に思想と学説の変更をともなった山鹿素行の思想を理解することは非常に難しいが、堀勇雄（人物叢書「山鹿素行」著）は、素行学の本質・特徴として、以下六点に分けて述べているので、その骨子を紹介する。

① 実学的傾向

素行学に一貫する特質で、日用事物の上に役立たぬという実践的要求を以って、国学・歌学・老荘・仏教・陽明学・朱子学等を次々に批判し、揚棄した。

② 武士道理論の樹立

実学的傾向の帰結であり、武士として日常役立つべき教養知識を体系化すること、現実の武士生活における規範を立てることが素行学の目的であった。

*君臣関係を天地自然の儀則で不滅のものと考え、封建的主従関係を絶対視して人倫の大綱、道徳の基本とし、この上に土道論を構成し、土農工商の身分制度の固定化に努めた。

*封建的主従関係を絶対視し、武教主義を強調する結果、

徳川幕府の礼讃となり、王朝政治〔王政復古〕を否定し、反駁的尊王論に反対した。

*奉公と恩賞との交換関係であった戦国武士道を、義の精神を中核として純化し、近世武士道を確立した。

*武士は道徳的に優れているから、三民（農工商）の上に立つのだと説いた。

*農民を商工の下に置き、あらゆる拘束・収取を加え、食うや食わずの境涯に置くことを以って、民を愛する所以であると強説した。

③ 山鹿流兵学を完成

素行学は本質的に兵学である。しかし、素行以後、ほとんど見るべき発展はなく、特に経学の領域においては停滞のみならず、退歩さえ感じられる状態であった。

④ 古学唱導の先駆

⑤ 日本中朝主義

中国ではなく日本を以って中華・中朝とする日本中朝主義は、素行によってはじめて主張された。

⑥ 武教主義

日本国体の優越性を強調し、尊王の必要を説きながらも、公家政治の道に違えるを難じ、武家政治の撥乱反正の功を讃えて、覇道を認め徳川幕府の政治を正当視し、王朝復古論・反駁的尊王論に反対した。

『中朝事実』には、「夫れ天下の本は国家に在り。国家の本は民にあり。民の本は君にあり。」とあり、「民の本は君に在り」は素行の創見である。

素行の国体観念は武教主義を本質とするもので、「皇室（天皇）中心主義」ではない。

建武中興・楠木正成を真似るな

「山鹿語類」巻第十五、臣道に、「士の出処・去就」に関し、以下の通り記述があり、反駁的尊王を厳に戒めている。

朝廷を重んじて武家を軽んずるは、往古の式、君臣の礼たり。

然れども末世に及んで、朝廷は名のみにして武家のはからひに任す。

ここを以って食録・官位に至るまで、皆武家の心に任せれば、往古に相かなわずといえども、世々皆是れを例とす。今又改むべきに便りなし。

あるべきことにあらざれども、当時（楠木）正成が依頼の如くならんことありとも、更に正成を以って準拠すべからざる也。

素行は、朱子学の道徳重視の観点から結果重視へと変化し、実利を重んじる兵学と欲心を否定する儒学の間にある根本的対立と矛盾をはらんでいる。（張捷「山鹿素行の土道論に関する研究」より）

素行は、正成を礼讃するも、反駁的尊王を戒めるが故、その一方で正成を真似るな、と説くことに。

（文責「四條駿楠正行の会」代表 扇谷昭）